

関西地域のオペラ活動2020

大田 美佐子

1. 概括：2020年 コロナ状況下のオペラ活動

関西はもともと、フェスティバルホールやザ・シンフォニーホール、いずみホールに代表されるような素晴らしいホールの存在感が大きかったが、2019年秋には、特にオペラ界にとっても重要な拠点となる新しい劇場のオープンが相次いだ。堺市のフェニーチェ堺、東大阪市文化創造館である。それを受けて2020年、フェニーチェ堺では堺シティオペラの《アイダ》、文化創造館では関西二期会の《カヴァレリア・ルスティカーナ》《パリアッチ（道化師）》の舞台が、その新たな拠点で幕を開けた。これらの劇場は、作品を披露する場というだけでなく、地域密着型かつライフスタイルを考えた街づくりと、「舞台芸術」とを協働させる重要な場となっていくだろう。

しかしながら2020年、関西のオペラ界は新型コロナウイルスの影響を如実に受けた。治療予防の有効な手段がない段階では、人が「集まる」ことそのものが危険と判断され、観客が「集まる」ライブハウスや劇場での音楽活動が停止状態に陥った。オペラ公演で中止や延期になった主なものを列挙する。関西二期会では、第93回オペラ公演《リゴレット》（東大阪市文化創造館、指揮：アルド・サルヴァーニョ、演出：パオロ・パニッツァ）、第94回オペラ公演《ドン・ジョヴァンニ》（兵庫県立芸術文化センター、2022年に延期）。兵庫県立芸術文化センターは、貸館としての事業とともに、毎夏のプロデュースオペラ《ラ・ボエーム》（指揮：佐渡裕、演出：ダンテ・フェレッティ）が2022年に延期となった。びわ湖ホールでは7月23日から26日ま

で公演予定だった《竹取物語》（指揮：沼尻竜典、演出：栗山昌良）が2022年に延期、11月28日・29日の《セビリアの理髪師》（指揮：沼尻竜典、演出：栗國淳）が中止、大阪音楽大学ザ・カレッジ・オペラハウスも11月6日・8日の《鬼娘恋首引》と《カーリユー・リヴァー》（指揮：牧村邦彦、演出：井原広樹）の中止を余儀なくされた。

びわ湖ホールの《神々の黄昏》と兵庫県立芸術文化センターの試み

準備に膨大な時間、資金、人を要する舞台芸術にとってこの突然の災難は大きな衝撃であったが、一方で、新しい試みも生まれた。滋賀県のびわ湖ホールは、2017年から毎年取り組んできたリヒャルト・ワーグナーのリング・ツィクルスの4作目《神々の黄昏》（演出：ミヒャエル・ハンベ、指揮：沼尻竜典、美術：ヘニング・フォン・ギールケ）を2日間連続で、無観客・無料配信で完結させた。この試みは大きな反響を呼び、全国に先駆けて「コロナ状況下でも芸術を諦めない」というメッセージを投げかけた。また、兵庫県立芸術文化センターは、夏のプロデュースオペラにくわえ、開館15周年の記念事業として予定していたリヒャルト・ワーグナー《ニュルンベルクのマイスタージンガー》（指揮：大野和士、演出：イェンス＝ダニエル・ヘルツォーク。東京文化会館、新国立劇場、ザルツブルク・イースター音楽祭、ザクセン州立歌劇場共同制作）も中止せざるを得なかったが、コロナ禍で舞台が上演できないなか、宝塚歌劇団の名曲〈すみれの花咲く頃〉を介して様々な人々がリモートで合奏や合唱に参加

するプロジェクトを始動、観客と劇場との対話の場を開く試みを積極的に行った。6月19日には「オーケストラ公演の再開に向けて～ディスカッションとデモ演奏」という催しを報道関係者以外無観客で行い、YouTubeやSNSでライブ配信した。また、あわせて準備の過程としてのホールの飛沫対策やスモーク実験を公開するなど、科学者と音楽家、劇場との協働を通じて、コロナ時代に必要な科学的知見を劇場運営に位置づけた。このように、近畿地域のオペラ上演で基幹となる劇場が、緊急事態の最中にも希望をつなぐという意味で大きな役割を果たしたことは、関西に留まらず全国的な視野で、コロナ状況下での明るい材料だったと評価できる。

こうした試みが、テレビやネットのニュースで一般に紹介される一方、2020年7～8月の日本音楽芸術マネジメント学会（JaSMAM）の分科会・シンポジウム（一般に公開）などでも、コロナ下の舞台芸術の現状について、全国的な視野をもった意見交換の場が設けられ、関西の現状が発信されたことにも大きな意味があった。これからのオペラ界が、ローカルな地域をグローバルな視野で育てるという視点から、アナログでリアルな世界に基盤を置きつつも、より広い世代に高い水準でアピールしていくためには、オンラインの効果的な利用がますます必要になってくる。

オペラを通じた学び

特に地域のオペラ文化の育成という点では、オペラ上演が行われないことで学びの場が衰退し、萎縮していつてしまうことも懸念された。しかし、ザ・カレッジ・オペラハウスで行われる大阪音楽大学のチマローザ《秘密の結婚》や神戸女学院講堂で行われる神戸女学院大学の学生オペラ《フィガロの結婚》

に向けて稽古に励む現場からも、オペラの火は消えなかった（「晴れ舞台への熱い思い 学生オペラ 本番に向けて」「関西音楽新聞」第822号、2020年12月1日発行）。思えば、20世紀の大戦間期に試みられた「学校オペラ」というジャンルは、必ずしも観客を必要としないという作品ジャンルでもあったが、その真意は、「作品が演者達の学ぶ現場である」という認識であった。コロナの状況を受けて、オペラ演出家の岩田達宗氏は、「古くから伝わる大切なことを、学び、検証し、未来のために新たなものを創造する」という「稽古」を本来の意味で見直す「道場」を、オペラ歌手の育成のためにリモートで不定期に開催しているという（岩田達宗「ばうぜ」、「関西音楽新聞」第821号、2020年11月1日）。

新型コロナによる厳しい状況は、次世代に向けてメディアを活用する問題をつきつけた。それだけでなく、その育成の課題についても、関西のオペラ団体、劇場が様々に思索し、共に挑戦していく契機となっていくように思われる。

以下に、2020年に行われたオペラ上演について報告する。

2. 2020年に行われたオペラ公演について

2.1. 関西二期会《カヴァレリア・ルスティカーナ》と《パリアッチ（道化師）》（2月22・23日／東大阪文化創造館／字幕付原語上演）

東大阪文化創造館で開催された関西二期会の第92回オペラ公演は、ヴェリズモ・オペラの伝統的な2本立てであった。演出は、イタリアのパオロ・パニツァ。同じ演出家が美術も担当する仕掛けで、観客にとっては、まさにこの2作品の発想の違いを起点に比較する楽しみが生まれた。この2作品には、男女の裏切りと嫉妬、復讐のテーマが通底し、特

に今回の上演ではその違いが、十字架や場の作り方、群衆の性質などに鮮明に表現され、ドラマの多層性に目を向けた深い理解につながった。

たとえば、《カヴァリレア》を覆う重い悲壮感、モノトーンの舞台、十字架と教会の重厚な存在感に宿る。《パリアッチ》では、教会はあくまで遠景として霞み、鉄の門が楽屋の鏡と化し、広場は祝祭の場になる。極彩色の舞台では、舞踊や合唱の存在感があり、子供もいるバラエティーに富む群衆の動きが個性的で、賑やかだった。リアルな民衆の姿を描いたと言われるヴェリズモ作品でも、その描き方によって、前者の叙情性と後者の諧謔性が明らかになった。また、鏡の優れた象徴性を指摘する評もあった（「メルキュール・デザール」Vol.54（2020年3月15日）能登原由実評）。

福原寿美枝は影のあるサントウツアを好演。片桐直樹の意気軒昂なアルフィオと並び好評だった。また、《パリアッチ》では、ネッダ役の森井美貴が、小悪魔のようなコケティッシュで妖艶な魅力を、シュルレア的に表現し秀逸。グイード・マリア・グイード率いる大阪交響楽団は、最初は力みがみえたものの、総じて美しく厚いサウンドを奏で、特に《パリアッチ》では、歌との自然な関わり合いが上演全体の絶妙なテンポ感を支えて好演であった。

2.2. びわ湖ホール

2.2.1. オペラへの招待《こうもり》（1月10～13日

／中ホール／字幕付日本語上演）

びわ湖ホールのシリーズ「オペラへの招待」では、ヨハン・シュトラウスのオペレッタ《こうもり》が取り上げられた。演出の中村敬一、指揮の秋山和慶の名匠が率いた多彩なアンサンブルは、古典の品格を保ちつつ、若々しいウィーン・オペレッタの粋な「ロー

カル化」を通して、万人をオペレッタの楽しみへと誘う名舞台を実現させた。

中村敬一の演出は、絡み合う物語の流れと人物の関係性を丁寧に整理した手堅さがあった。3幕を通じて大きなセットを変えず、背景のスクリーンの変化や置物で雰囲気を変えることができ、シンプルで効果的な舞台装置。

その演出の重要な核となったのは、歌うワルツやチャールダッシュに見事に嵌る中山悌一の「歌って響く」日本語詞と台詞である。戦後の音楽界を牽引してきた名バリトンの日本語は、声が美しく伸びて言葉もわかりやすい。三重唱や二重唱で歌われる多歌詞の場合も、字幕の効果とともに問題なく楽しめる点でも優れていた。

秋山和慶の指揮は、旋律をたっぷり歌わせながらも、冗長な感じを与えない。勘所を押さえた絶妙なテンポ感で、管弦打のバランスの良い日本センチュリー交響楽団とともに、シュトラウスの音楽の優美さを余すところなく伝えた。出演者も粒ぞろいで、身のこなしが優雅な黒田博のファルケや、コケットさが魅力のアデーレを演じた熊谷綾乃など、芝居のできる歌役者の存在が光った。

歌役者の点で特筆に値するのは、今や俳優やお笑い芸人などの有名人特別枠がおきまりとなった第3幕のフロッシュである。今回はびわ湖ホールの音楽アンサンブルのメンバー、林隆史が演じ、語呂合わせのカンツォーネや琵琶湖周航の歌を観客と合唱するなどで観客席を沸かし、「歌えるフロッシュ」ならではの存在感を存分に打ち出した。

2.2.2. 「ニーベルングの指環」第三夜《神々の黄昏》（3

月7・8日／大ホール／無観客無料ライブ配信

／字幕付原語上演）

新型コロナウイルスの感染拡大防止で、多くの劇場で上演中止となるなか、びわ湖ホールがワーグナーの楽劇《神々の黄昏》を無観

客上演、ライブ配信した。権力の象徴である黄金の指輪をめぐる神々と巨人族、地下に住むニーベルング族との闘争を描く全四部の最終章だが、完結を見守るはずの満員の観客がいない上演となった。

ミヒヤエル・ハンベの演出は裏切りや怒り、愛と自己犠牲など、ますます複雑に絡み合う物語と音楽との密接な関係性を鮮やかに描き出す。ヘニング・フォン・ギールケの装置は、場と場をよどみなく繋ぐ叙情性を湛えたライン川の映像で、リアリズムとイマジネーションを往来し、更なる進化をみせた。沼尻竜典率いる京都市交響楽団もドラマそのものを雄弁に描き出し、ワーグナー歌手の系譜に新しい一頁を加えた日本の歌手陣の奮闘も賞賛に値するものだった。

最終場面、権力をめぐる長い攻防の末路、神々のワルハラ城は炎上し、黄金の指環はライン川に返される。その桃源郷に輝く特別な美しさは、いかなる権力も自然の力の前に無力であることを強烈に問いかけた。公演のライブ配信は、短期間でSNS上でも話題を呼び、気迫漲る舞台に感銘を受けた新たなファンを生み出す機会にもなった。このスピード感のある画期的な試みは、全国紙やテレビニュースなど各メディアでも取り上げられ、地方の劇場の発信力としても「日本の舞台芸術に、起爆剤以上のインパクトを与えた偉業」と評価が高かった。(井内美香「延べ36万人が観た無観客・中継上演の熱き舞台裏ーびわ湖ホールオペラ『リング』」2020年3月19日 Webマガジン「ONTOMO」／毎日新聞2020年5月15日付「『#びわ湖リング』ネットで41万人視聴のオペラ、ブルーレイで発売」など)

2.3. 兵庫県立芸術文化センター「心の広場プロジェクトどんな時も歌、歌、歌! ~佐渡裕のオペラで会いましょう」(7月23・24日／KOBELCO 大ホール)

メインのプロデュースオペラの公演《ラ・ボエーム》は2022年に延期となったが、本来、オペラ公演が行われる予定であった7月23日と24日には、二日間であわせて800人弱の観客を実際に入れて、佐渡裕芸術監督の声がけの下、「兵庫県立芸術文化センター 心の広場プロジェクトどんな時も歌、歌、歌! ~佐渡裕のオペラで会いましょう」という特別演奏会が開催された。当日は、兵庫芸術文化センター管弦楽団とソプラノの並河寿美、テノールの清原邦仁、水口健次、バリトンの大山太輔、片桐直樹が、ひょうごプロデュースオペラ合唱団メンバーとともに、ロッシーニ、プッチーニ、レハールなどの名曲を披露した。特筆すべきは、その開催までの感染症専門家と音楽家、劇場運営側との協議やプロセス、上演での実施策などの具体例を盛り込んだ公演の報告書が、2週間のうちにまとめられたことである。とりわけ、公立の劇場として、実験結果を共有し、役立てるために、ネットで広く一般に公開された点も高く評価されている。

https://www1.gcenter-hyogo.jp/img/news/2020/2020072324_houkoku.pdf

2.4. 堺シティオペラ：ヴェルディ《アイダ》(1月

11・12日／フェニーチェ堺／字幕付原語上演)

演出：栗國淳／指揮：牧村邦彦／アイダ：並河寿美、水野智絵／ラダメス：ルディ・パーク、藤田卓也／アムネリス：福原寿美枝、伊藤絵美／エジプトの王：クリスヤニス・ノルヴェリス／アモナズロ：迎肇聡、井原秀人／ラムフィス：伊藤正、片桐直樹／巫女長：端山梨奈、老田裕子／伝令：瀬田雅己、鳥影聖人／管弦楽：ザ・カレッジ・オペラハウス

管弦楽団／合唱：堺シティオペラ記念合唱団
／合唱指揮：岩城拓也

フェニーチェ堺のこけらおとしのひとつともなった堺シティオペラの《アイダ》の公演は、堺という街の音楽文化の成熟度のひとつの証左ともなった。「地方都市で自主製作されるオペラとしては飛び抜けて豪華な舞台」（「メルキュール・デザール」Vol.53（2020年2月15日）、能登原由実 評）であり、150名もの大合唱団による凱旋の場面などのスケールは圧巻であった。栗國淳の演出は、「劇の流れに自然に沿ったもの」として、「単なるスペクタクルやセンチメンタルな仕掛けに安住しやすいこの題材に対し、それらを超えた別の次元に気づかせてくれたところに本公演の大きな成果があった」（能登原 評）と評された。

2.5. みつなかオペラ 景山仲夫《満仲～美女丸の廻心》 （台本：橋口武仁）（10月10・11日、みつなかホール・日本語上演）

演出：井原広樹／指揮：牧村邦彦／合唱指揮：岩城拓也／所作監修：大西礼久／映像・装置プラン：増田寿子／照明プラン：原中治美／音響コーディネーター：小野隆浩／衣裳：村上まさあき／管弦楽：ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団／満仲：片桐直樹、福岡勲／仲光：西尾岳史、迎肇聡／美女丸：近藤勇斗、中川正崇／幸寿丸：香川梨佳、阪上真知子／ゆり：岡田彩菜、西田真由子／陰陽師：松森治／満仲妻：納谷知佐／仲光妻：尾市雅子／寺僧：東平間／恵心：柏原保典

景山仲夫作曲の4幕のオペラ《満仲～美女丸の廻心》（台本：橋口武仁）は、2000年にみつなかオペラに捧げられた創作オペラである。物語は平安時代の武将、満仲とその子美女丸、家臣の仲光の二組の親子をめぐり、厳

格で悲哀に満ちたその関係性を描く。

舞台には額縁のような枠が設えられ、背景の映像には、激しい戦闘の火や、移ろいゆく摂津の美しい山々、心象風景などが映し出された。人の心の動きと、外の世界を観客に対比的に意識させるしかけである。井原広樹の演出は、シンプルな装置の中で照明の陰影を巧みに使い、物語では核となる主役たちの歌と演技を際立たせ、ドラマチックで雅な歴史絵巻を現出させた。歌手は、それぞれの役柄の性格とその気持ちの変化を、歌だけでなく、着物の所作も含めた立ち振る舞いで、見事に表現した。特に、家臣の揺れる心と我が子を討つ葛藤と悲しみを演じた仲光役の西尾岳史、重厚な存在感の満仲役の片桐直樹、残酷なほど天真爛漫な美女丸の開眼に至る変化を演じた近藤勇斗の好演が際立った。

牧村邦彦率いるザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団は要を得た絶妙な間合いでドラマを支え、リヒャルト・シュトラウスやベルクの西洋モダンな響きと、弦楽器とフルートで笙を模すなど、和の響きのハイブリッドな景山サウンドの醍醐味を伝えた。また、矢を射る音や、死を意味するクライマックスのシンフォニックな効果で、ドラマの音楽として色あせないその普遍的な魅力を証明した。

エピローグでの陰陽師の語り「はかなきは人の命 死者の魂いずこにさまよう」は、コロナ禍の時代にあって、マスクをつけて舞台上で歌う演者たちの生の声と対比され、いっそうこのオペラの生命力を感じさせた。現代オペラの希少な再演にあって、身近な歴史を観客に生き生きと伝え続けるエンターテインメントとして、ご当地ものの創作オペラが演じ続けられることの重要性を示した。

2.6. ベートーヴェン・イヤーの《フィデリオ》(11
月12日、ザ・シンフォニーホール／字幕付原語
上演)

指揮：飯森範親／フロレスタン：水野秀樹／
レオノーレ：木下美穂子／ロッコ：山下浩司
／マルツェリーネ：石橋栄実／ヤキーノ：松
原友／ドン・ピツァロ：町英和／ドン・フェ
ルナンド：萩原寛明／合唱：日本センチュ
リー合唱団

2020年はベートーヴェンの生誕250周年
のメモリアル・イヤーだが、ザ・シンフォ
ニーホールでは、日本センチュリー交響楽
団第250回定期演奏会として演奏会形式で
《フィデリオ》が上演された。指揮したのは、
古典派のハイドンに拘った演奏会も手がけて
きた飯森範親。

政敵の陰謀で投獄された夫のフロレスタン
を救出しようと、男装して「フィデリオ」を
名乗るレオノーレ。それと知らずにフィデリ
オに恋心を抱くマルツェリーネや看守長ロッ

コなど、このオペラの重唱はどれも登場人物
の孤独な魂を歌うが、その登場人物たちの重
ならない思いを、管弦楽団は室内乐的なきめ
の細かさでまとめあげた。地下牢の暗闇でフ
ロレスタンが歌う第二幕では、彼の嘆きと希
望の揺れを水野秀樹が見事に表現した。そこ
から一転、レオノーレとフロレスターの再会
によって、自由を渴望する音楽の活気が一気
に弾けた。レオノーレ役の木下美穂子は拍手
喝采の好演。木下の輝く歌唱に、物語全体が
先導されたと言っても過言ではない。

あいにく、ベートーヴェン・イヤーはコロ
ナ禍に見舞われ、関西地域では、年末の第九
もリモート演奏や、合唱や楽器編成を小規模
に変えるなどの試みが積極的に行われた。そ
んななかにあって、自由を希求するフィデ
リオの音楽が奏でられたことは、舞台に歌
が戻ってきた喜びと重なり、「コロナに苦し
む人々の希望の光」(『関西音楽新聞』第822
号、2020年12月1日発行、横原千史 評)と
感じた人々も多かったのではないかな。